

専門職大学院の「理論・研究と実践・実務との架橋・融合」に関する一つの基礎的調査研究

大野 精一¹、黒石 憲洋²

専門職大学院の「理論・研究と実践・実務との架橋・融合」について、「理論・研究」と「実践・実務」に対するイメージの検討をおこなった。学校教員を対象として質問紙調査をおこない、2回の調査を通じて98名（男性41名、女性49名、不明8名）から回答を得た。結果としては、「理論・研究」については固い（柔軟でない）イメージがあり、「実践・実務」と「理論・研究」のイメージのもっとも大きな差は親密さにあることが示された。これらの差異をもたらす要因としては、性別や勤務年数などが挙げられた。また、「理論・研究と実践・実務との架橋・融合」への態度の分析からは、シンプルな「理論・研究」に対する期待が示唆された。さらに、学校現場で役に立つ大学での授業形態として、ケーススタディや各種のインターンシップ、授業観察・分析などが認識されていることが明らかとなった。

1. 問題の所在

筆者のうちの一名は35年間の公立高等学校教諭を勤めた後に定年まで2年を残して実務家教員として大学院に転職し、6年間の経過した。高校勤務時代に特にアカデミズムを意識して仕事をしてきたことはないし、またその成果を特に必要ともしなかった。「乖離」というにはあまりにも深く広い暗い溝であり、それはあたかも別次元、別世界（ここに価値的な優劣はない）のことであった。さらに「大学教員」（本務校以外の大学・大学院の経験も含む）としてのこの6年間は筆者にとって極めて居心地の悪いものであった。これは本務校等の環境（研究と言うことを見れば現在の方が数段自由で快適である）というものではなく、「理論・研究と実践・実務」の隙間にすっぽりとはまり込んで、にっちもさっちもいかない状況に起因している。その一方で各地に教職大学院が設置され、基本的にはアカデミズム主導のものに「理論・研究と実践・実務」の「架橋・融合」が語られている。一体これは何なのだろうと言う思いが筆者にはある。

1 日本教育大学院大学 学校教育研究科 教授

2 日本教育大学院大学 学校教育研究科 准教授

どこに解決の方向性が見いだされるのか。おそらくその一つとして、「専門的」という概念を具体的なイメージを伴いつつ精緻化する作業から探索できるのではないかと思われる。大学・アカデミズムだけが「専門的」であるわけではない。実践・実務現場での十分に「専門的」であるにもかかわらず、この両者の「専門的」な領域・スキル・哲学・知識等の「架橋・融合」がなされないままに今日まで来てしまったのである。

「専門的」とはそもそもどのようなことであろうか。それはおそらく三次元的に構成されるものと考えられる。「深く・細かく」という狭義の「専門性」、適用範囲を広く拡大して社会に貢献する「専門職性」、そして両者に共通する濃く厚く対処できる「卓越性」という3つの次元である。ここからわれわれの課題を再定義すれば、「理論・研究と実践・実務」の「深く広い暗い溝」（乖離・隙間）を、ともに「卓越性」（濃・厚）を有しつつアカデミズムの「専門性」優位（深・細）と実践現場の「専門職性」優位（広・拡）とで拮抗している状況に「架橋・融合」の方向性を見いだすということになる。

これはあまりにも大きな問題・課題・論題であることを承知している。われわれの今回の研究はその微かな一歩（解決に向けての離陸の準備）でしかない。先ずわれわれは実践・実務サイドに立つ。さらに安易に埋め得ようのない「深く広い暗い溝」（乖離・隙間）それ自体のイメージを出発点にした（研究ノートその一）。その上で自由記述に語られた現場サイドからの思いや希望等を構造化することで、今後の方向性を模索した（研究ノートその二）。
(大野精一)

2. 方法

学校教員を対象とした2回の質問紙調査をおこなった。

第1回調査

2010年度に関東圏のある県で実施された10年経験者研修（公立学校の教諭等としての在職期間がおおむね10年に達した者に対して各都道府県教育委員会等が実施する法定研修；個々の能力、適性等に応じた研修がおこなわれる）の参加者を対象として、質問用紙の配布・回収をおこなった。有効回答者は、54名（男性32名、女性20名、不明2名）の国・公立学校の教諭であった。内訳は、中学校教諭1名、高等学校教諭27名、特別支援学校教諭24名、などであった。

第2回調査

2010年度に関東圏のある県で実施された学校カウンセリング専門講座（学校カウンセリングあるいは教育相談を校内で実践、あるいは今後実践しようとする教諭で基礎講座等の修了者が受講する希望研修）の参加者を対象として質問用紙の配布・回収をおこなった。有効回答者は44名（男性9名、女性29名、不明6名）の公立学校の教諭であった。内訳は、小学校教諭20名、中学校教諭14名、高等学校教諭6名、特別支援学校教諭4名、などであった。

今回は、これらの有効回答を併せたものを分析対象とした。したがって、最終的な有効回答者は

98名（男性41名、女性49名、不明8名）であった。

調査項目

調査用具としては、「理論・研究と実務・実践との架橋」に関するアンケート調査」と題する、全1ページからなる質問用紙を使用した。「大学（広くアカデミズム）の「理論・研究」に即した教職養成（社会的に高度な専門職業人）には限界があります。学校現場における「実践・実務」との「架橋」がどうあるべきか求められています。」と教示した上で、以下の質問をおこなった。

まず、回答者の属性情報として、0) 性別、1) 所属（学校設置者：公立、私立、国立、および学校種：幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、大学、高等専門学校、特別支援学校）、2) 所属校の種類（普通科、工業科、商業科、農業科、理数科、その他）、3) 職名（校長、教頭／副校長、教諭、養護教諭、その他）、4) 勤務形態（常勤、期限付き採用、非常勤、その他）、5) 勤務年数、6) 教科、7) 社会人経験（有、無）、を尋ねた。また、勤務を取り巻く状況として、8) 校内外の研修会への参加（多い、どちらともいえない、少ない）、9) 日常的に接する問題・課題（量：多い、どちらともいえない、少ない、質：複雑で解決が難しい、どちらともいえない、今までの経験等で対応が可能）を尋ねた。

さらに10)「理論・研究」に対するイメージ、および11)「実践・実務」に対するイメージについて、満足（満足～不満）、充実（充実～空虚）、柔軟性（柔軟～固い）、明快性（すっきり～もやもや）、積極性（積極的～消極的）、親密性（親密～孤独）、自由さ（自由～不自由）の7つの観点から、各5段階で評価することを求めた（ただし、調査用紙に記載する上では柔軟性および親密性、自由さについては選択肢の提示順を逆転した）。

その他、12) 学校現場で役に立つ大学での授業形態（講義形式、フィールドワーク、ケーススタディ、シミュレーション授業、授業観察・分析、ロールプレイ、各種のインターンシップ、双方向の議論、その他、の中から2つ選択）を尋ねた。また、13)「理論・研究と実務・実践との架橋」を目指す大学教員としての注意点、および14)「理論・研究と実務・実践との架橋」を目指す大学として設置すべき科目についての助言を自由記述により求めた。最後に、15)「理論・研究と実務・実践との架橋」を目指す専門職養成の方向性についての態度を賛成～反対の5段階で回答を求めた上で、その理由を自由記述により求めた。

本稿では、10) および11) で得られた「理論・研究」および「実践・実務」に対するイメージを中心とした分析をおこなった。必要に応じて0)～9) で得られた回答者の属性および勤務を取り巻く状況などにより比較をおこない、また、15)「理論・研究と実務・実践との架橋」を目指す専門職養成の方向性についての態度との関連を検討した（自由記述部分については次稿以降に分析を譲る）。

なお、5段階評定による回答については、分析においては便宜的に間隔尺度と見做して分析をおこなった。

（黒石憲洋）

3. 結果

回答者の属性

まず、性別の内訳については、男性41名、女性49名、不明8名であった。所属の内訳は、小学校教諭20名、中学校教諭15名、高等学校教諭33名、特別支援学校教諭28名、その他・不明2名であった。そのうち、公立90名、国立3名、不明5名であった。また職名の内訳は、校長・教頭（副校長）0名、教諭92名、養護教諭6名であり、勤務形態は常勤96名、期限付き採用・非常勤0名であった。勤続年数については、～10年32名、10～20年35名、20年～30名、不明1名であり、平均16.0年（標準偏差7.88）であった。

以上の結果より、回答者のほとんどは公立学校の常勤の教諭であり、性別や学校種、勤続年数については比較的バランスのとれたサンプルであると見做して、以降の分析をおこなった。

記述統計

社会人経験および校内外の研修会への参加頻度、職務上で日常的に接する問題・課題の頻度、職務上で日常的に接する問題・課題の困難さについては、以下のような結果であった。

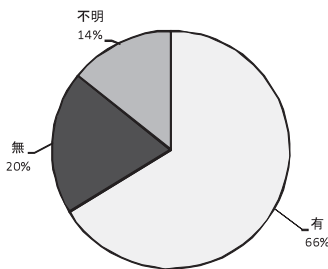


図1. 社会人経験の有無

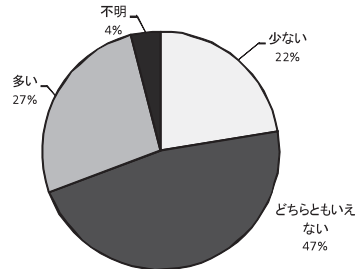


図2. 校内外の研修会への参加頻度

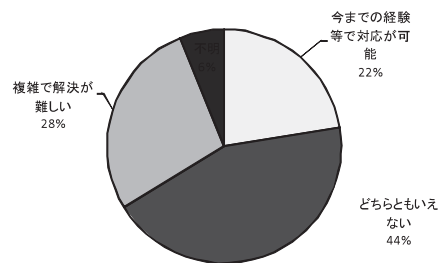
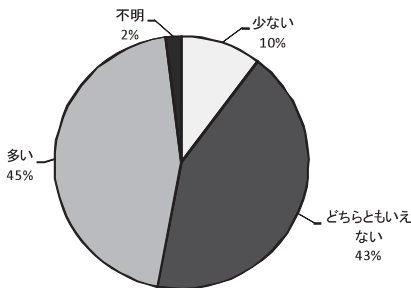


図3. 職務上で日常的に接する問題・課題の頻度 図4. 職務上で日常的に接する問題・課題の困難さ

「理論・研究」および「実践・実務」に対するイメージの差異について

回答者の「理論・研究」および「実践・実務」に対するイメージを図7に示した。

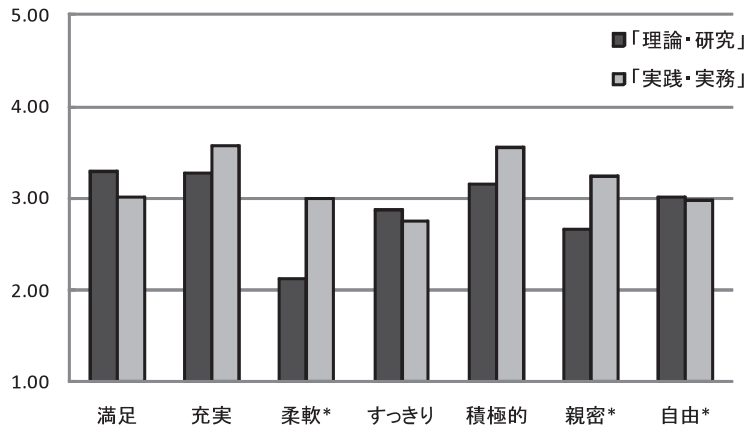


図5. 回答者の「理論・研究」および「実践・実務」に対するイメージ

まず、論理的中央値である3（「どちらともいえない」）を検定値として t 検定をおこなった。「理論・研究」については、満足、充実、柔軟、親密で有意差がみられた ($t_{(88)} > 3.10$, $ps < .01$)。すなわち、「理論・研究」に対しては、満足、充実、固い、孤独というイメージであった。一方、「実践・実務」については、充実、すっきり、積極、親密で有意差がみられた ($t_{(91)} > 2.10$, $ps < .05$)。すなわち、「実践・実務」に対しては、充実、もやもや、積極、親密というイメージであった。

さらに、各項目について「理論・研究」－「実践・実務」間で比較をおこなった。その結果、充実、柔軟、積極、親密において有意差がみられた ($t_{(85)} > 2.26$, $ps < .05$)。すべての項目において、「実践・実務」の方が「理論・研究」よりも充実、柔軟、積極、親密というイメージが強かった。

次に、「実践・実務」と「理論・研究」の差得点を算出し、性別、勤務年数、社会人経験の有無、校内外の研修会への参加頻度、職務上で日常的に接する問題・課題の頻度、職務上で日常的に接する問題・課題の困難さによる差異の有無を検討した。性別に関しては、柔軟、すっきり、積極で有意差がみられた ($t_{(76)} > 2.15$, $ps < .05$)。いずれにおいても、男性の方が女性よりも差異が大きかった。勤務年数に関しては、柔軟のみで有意差がみられ ($F_{(2,88)} = 3.74$, $p < .05$)、10～20年の教員は20年～の教員と比較して差異が大きかった。社会人経験の有無、校内外の研修会への参加頻度、職務上で日常的に接する問題・課題の頻度、職務上で日常的に接する問題・課題の困難さに関しては、いずれもすべての項目において有意差は認められなかった ($F_{(1,71)} < 3.08$, ns)。

「理論・研究と実務・実践との架橋」への態度

回答者の「理論・研究と実務・実践との架橋」への態度についての結果を図6に示した。

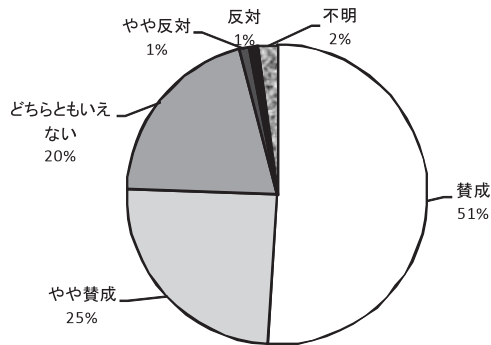


図6. 回答者の「理論・研究と実務・実践との架橋」への態度

およそ半数の回答者が、「理論・研究と実務・実践との架橋」に対しては賛成であると回答していた。また、やや賛成を合わせると、およそ四分の三の回答者となり、多くの回答者が「理論・研究と実務・実践との架橋」に対して賛成であることがわかる。

さらに、「理論・研究と実務・実践との架橋」への態度を基準変数、回答者の属性などを説明変数とした重回帰分析をおこなった。しかし、回帰式自体が有意ではなかった ($F_{(6,59)}=0.28, ns$)。

表1. 回答者の属性を説明変数とした重回帰分析

説明変数	β	有意水準
性別（女性）	-.096	
勤務年数	.071	
社会人経験の有無	-.075	
研修会への参加頻度	-.032	
日常的問題の多寡	.133	
日常的問題の難易	-.069	
R^2	.028	

注) 性別と社会人経験の有無はダミー変数。

表 2. 「理論・研究」と「実践・実務」に対するイメージの差異を説明変数とした重回帰分析

説明変数	β	有意水準
満足	-.078	
充実	.109	
柔軟*	.105	
すっきり	.358	*
積極的	.053	
親密*	-.270	
自由*	-.141	
R^2	.128	

* $p < .05$

また、「理論・研究と実務・実践との架橋」への態度を基準変数、「理論・研究」と「実践・実務」に対するイメージの差異を説明変数とした重回帰分析をおこなった。やはり、回帰式自体が有意ではなかった ($F_{(7,72)}=1.50, ns$)。ただし、説明変数の中では、すっきりのみが有意となり、「実践・実務」と比較して「理論・研究」がすっきりしていると感じている回答者ほど、「理論・研究と実務・実践との架橋」への態度が肯定的であったといえる。

学校現場で役に立つ大学での授業形態

回答者の考える学校現場で役に立つ大学での授業形態について、図 7 に示した。

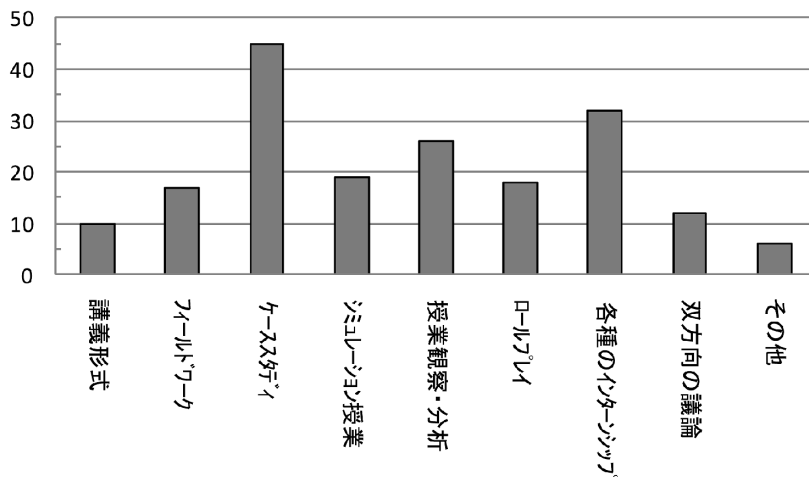


図 7. 回答者の考える学校現場で役に立つ大学での授業形態

この質問は最大2つまでの複数回答を可としたものであるが、回答としてはケーススタディが多く(45名)、続いて各種のインターンシップ(32名)、授業観察・分析(26名)などの回答が多かった。(黒石憲洋)

4. 考察

本調査の回答者については、その基本属性等を分析したところ、公立学校の教諭(常勤)としては、性別や学校種、勤続年数については比較的バランスのとれたサンプルであると見做された。ただし、今回の調査は学校カウンセリングあるいは教育相談に関連する講義に際してデータ収集をおこなったものである。一般的な意味での「理論・研究と実践・実務との架橋」についての調査であると教示をおこなった上で実施したが、回答者において学校カウンセリングあるいは教育相談という文脈が意識された可能性もあり留意が必要である。しかし、本研究の結果は一定の意味ある示唆を含むものであると考える。

結果としては、まず「理論・研究」および「実践・実務」それぞれに対するイメージの分析をおこなった。「理論・研究」に対しては、固い(柔軟でない)・孤独(親密でない)というイメージがあったものの、充実しており満足しているという結果が得られた。一方、「実践・実務」に対しては、もやもや(すっきりしていない)ものの、親密・積極的で、充実しているという結果であった。

また、「理論・研究」－「実践・実務」間でイメージの比較をおこなった。その結果、「実践・実務」の方が「理論・研究」よりも柔軟であり、親密・積極的で、充実しているというイメージが強かった。ただし、充実・積極に関しては同一方向の程度の差であった。したがって、もっとも大きい差異としては、「理論・研究」が特に固い(柔軟でない)というイメージを持たれており、「実践・実務」は親密であるのに対して「理論・研究」は孤独(親密でない)と捉えられているという点であった。現場教員の視点からは、「理論・研究」は堅苦しく・柔軟性がないものであり、「実践・実務」には親和的である一方で「理論・研究」には疎遠であるといえよう。ただし、「理論・研究」および「実践・実務」のいずれに対しても、極端に肯定的／否定的なイメージでなかったことにも注意が必要である。

これらの差異をもたらす要因としては、性別と勤務年数が考えられる。男性は女性と比較して柔軟・すっきり・積極について、「実践・実務」－「理論・研究」間の差異を大きく認知していた。また、勤務年数については中堅教員(10～20年)の方がベテラン教員(20年～)よりも柔軟さについての差異を大きく認知していた。これらのことから、教員間にも性別や勤務年数などにより、「理論・研究」および「実践・実務」に対するイメージの違いがあることが示唆された。ただし、社会人経験の有無、校内外の研修会への参加頻度、職務上で日常的に接する問題・課題の頻度、職務上で日常的に接する問題・課題の困難さに関しては、影響は認められなかった。

「理論・研究と実践・実務との架橋」への態度の規定要因の分析からは、基本属性等の影響は認

められず、「理論・研究」－「実践・実務」間のイメージの差異におけるすっきりのみが影響を与えていた。すなわち、「実践・実務」と比較して「理論・研究」がすっきりしていると認知している程、「理論・研究と実践・実務との架橋」への態度は肯定的であったといえる。現場教員は「理論・研究」に対してシンプルな部分を求めているのかもしれない。

最後に、学校現場で役に立つ大学での授業形態については、ケーススタディや各種のインターンシップ、授業観察・分析などが有効であると回答された。これらは、専門職大学院における「理論・研究と実践・実務の架橋」を考える上で有効な示唆となると考えられる。（黒石憲洋）

以上のように、本研究では現場教員の持つ「理論・研究」と「実践・実務」に対するイメージ違いの一端を明らかにした。専門職大学院において、特に大学アカデミズム側から「理論・研究と実践・実務の架橋」を考える上では、まず「乖離」や「疎遠」の実態を浮き彫りにする必要があると考えたためである。「乖離」や「疎遠」を前提にし、そこに存在する「濃淡」「軽重」「大小」を検討することで、「架橋」のポイントを探ったものである。今後は、どのような「専門職」像を描くことが「架橋」に繋がるのかについて検討していく必要があると思われる。次稿では、今回の調査で得られた自由記述を分析することで、現場サイドからの思いや希望等を構造化することで、今後の方向性を模索したい。（大野精一）

参考文献

- 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（平成18年7月11日）
- 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）参考資料1. 教職大学院における「実務家教員」の在り方について」（平成18年7月11日）
- 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）参考資料2. 教職大学院におけるカリキュラムイメージについて」（平成18年7月11日）
- 森田真樹（2011）. 教育大学院における教員養成の現状と課題－京都連合教職大学院の実践を中心に－ 立命館高等教育研究 11号, 41-55.
- 阪梨撃・藤村法子（2009）. 連携協力校における教職専門実習の在り方と実務家教員の果たす役割 京都教育大学教育実践研究紀要, 第9号, 177-184.
- 佐藤浩一・入澤 充・所澤 潤・山口陽弘・山崎雄介・石川克博・岩澤和夫（2011）. 教職大学院におけるティーム・ティーチング実践と評価、今後の課題－ 群馬大学教育実践研究第23号、241-266.
- 『専門職大学院設置基準』（平成15年3月31日施行、平成22年7月15日最終改正）

Research Note

A Preliminary Research on “Bridge Construction between Theory and Practice” at Professional School

Ono, Seiichi and Kuroishi, Norihiro

This study collected data for preliminary research on “bridge construction between theory and practice” at professional school. The questionnaires were distributed to school teachers, and 98 respondents (41 males and 49 females) provided valid data through two investigations. As a result, “theory” was considered as much fixed (= not flexible), and a major difference between “theory” and “practice” was in the intimacy for school teachers. The factors relating to these images included the gender and work years at schools. Multiple regression analysis revealed that expecting “theory” to be simple brings positive attitude toward “bridge construction between theory and practice”. In addition, case studies, internships, and class-observation / class-analysis were suggested to be effective ways at professional schools. Some possible direction for the future studies was discussed.
